

別頁 五 段

二葉亭全集の改刷本の第三版が出ると。私
 を長谷川氏の遺著がもう一度世に讀まれる日
 の来とことを心から悦んで居る。左じめて長
 谷川氏の『浮雲』が出てから最早二十八九年
 の月日が経つ。二十八九年と少し月日を随介
 りろくは私の生活を変へ私の境遇を変へと

昨日と昨日

島田の友村



特別

文庫14

A168

53-1713

神/子

が、しかし長谷川氏を愛する心を
 出と當時からあつと今日まで同じやうな私
 續りて来て居る。これを畢竟自分の青年時代
 又氏の作から喚起されと清新なセンセエシエ
 ンとも言ふべきものが忘れられぬので、それ
 が自分の心の奥深く刻みつけられて居るか
 うであらう。長谷川氏を人も知るごとく露語
 子精しかつと人で、早くから露西亞の作家の
 書いととの又親んどとめ、浮雲のやうな
 作をするどけの力をも養われとであらうが、

2

と思ふ。

それよりして明治初年の文壇の空気の中であ
 れほどのものを書いととりふろとをインサイ
 トの豊かた氏の智力的な天分が想像せられ
 る。大きな作家あり批評家あり又言葉とい
 ふもの又對する純直な愛情と鋭敏な感覚とが
 ある。その点よ於りて當時長谷川氏又比ふべ
 き人をあかつと、言文一致体の文章を書き
 じめと作家として當時長谷川氏と並ぶ称され
 と人又山田羨妙齋氏がある。けれど山田

しと。氏を種々お問題を後から来る時代のもの
 のよ任せて置いて、それぎり長いこと沈黙し
 と。
 知つとのを自介の青年時代であつたとりふこ
 と。今又おつて、**私** **青** **車** の北村君を
 世界を見せて呉れと人を北村透谷君であつ
 人長谷川二葉亭氏であつとが、新しい詩の
 新しい散文の世界を開けて私を見せて呉れと
 世界を見せて呉れと人を北村透谷君であつ

見る

あのさかんあ

152

氏其他の作家が多く言ひまをしとりふことよ
 苦心しと中で、獨り長谷川氏のみを言葉えの
 ものから出發しとやうおところがある。浮
 雲と前後して氏をツルゲネエフの小品の譯
 を出しと。まど二十歳は足りぬ青年の私を
あ **の** **樺** **の** **林** **の** **よ** **ま** **の** **し** **て** **来** **る** **や** **う** **あ** **あ** **あ**
 びきとやめぐりあふとを開けて、何程あ
 譯文を愛讀しとか知れあひ。
 浮雲と書いて長谷川氏をやしをらく沈
 黙しと後で、都の花誌上はあの續篇を出

する保守的の反動がさまざまの勢で波を打つ
 て居と。私が雑誌『文学界』の同人として文
 壇へ踏出し頃、丁度さうしと後を受けと
 時代で、学問や藝術の世界も混沌としとの
 であつと思ふ。極端な歐化主義、それと對
 立する國粹保存の聲、それらの激しい争ひが
 次第に沈み行つて、東西のものゝ調和と
 りふことがさかん唱へられるやうな成つ
 と。さうしと調和的思想が一切の学問や藝
 術の世界を支配して居ると言つてよい。

とが何度し何度し同君の自分の胸に活きかへ
 つて来るおしな原因であらうと思ふ。北村君
 の遺しとものを~~の~~讀むものを、~~の~~未完成な
 かかしの断片を通して~~の~~さかんな詩の
 深奥な詩の精神を讀みねを成るまい。
 吾國に於ける十九世紀の末と言へを實に思潮
 の入り乱れと時であつと。一切のものが統一
 を欲して叫びを揚げて居と。外來の文明に對

文学界には書りて見とこともある。あの感
 想を書いと頃から私を自分の行くべき細道
 が一層をつきりして来とやうな思ふ。漠然
 として調和とりふやうなものが何を自分等
 齎さう、自分等青年をいつと直接は自分等の
 内部は芽ぐんで来るものを重んじ育であけれ
 を成らふいと考へと。
 当時自分の周囲にあつた文学界の同人の
 中で、北村透谷君を既に亡くあつて居と。
 私をあの友人の後を追つて、いつと心の戦を

論
 ハハ

何しかし新規を始めあけれを成らあかつとの
 が自分等の青年時代であつと。私を歩けを歩
 くほど當時の調和的思想とりふしのを疑ふ
 やうな成つと。私を若かつと心はも左様思つ
 と。天才を金のやうなものと。烈火とりとし
 焼くことが出来ぬ。どうして東からし西か
 らも藝術の精華を集めて来て、幾多の性質を
 異にし生立ちを異にしと天才の作つとしのを
 一つの焔中を熔和するあどろりふことが出来
 やうかと。その考へから、私を一つの感想を

と

道を取つて歩き出した。氣質の介れ行くこと
 とを奈何ともしることが出来あかつと私を
 自分一個の小さな歴史の中で、一緒にロセツ
 クの詩集を寫しとりルチンの『基督傳』を讀
 んどりしと若い友達と別れ路を立とせられ
 とあの時の心持を今どよ忘れることが出来な
 い。
 私を東北の方へ寂しい旅をした。仙臺へ行つ
 て、詩歌とりふしのをしつと自分等の若い心
 を近づけやうと試みと。私の出しと處女作

のある

のである。

ハル

續けて行かうとしと。私があゝの感想を書いと
 と同じ号又上田敏君も長い論文を出しと。上
 田君を純然とるエキゾチックの立場から
 靜かに學藝の鑑賞を樂み、まゝその學藝によ
 りて立身出世の途を歩かるといふのであつ
 て、上田君と私との出発点の相違が二人の書
 いともの明瞭な感じられて來と。當時平田
 君と私を私達二人の書いとものを讀み比べ
 て、自分をむしろ上田君の立場を賛成すると
 言われと。上田君と私とをあの時すでに別の
 まう

の詩集をその日でも自分のついでに行つて
足跡可成深い文章をとりて居る。

前よ言つと調和的思想とりふしのを直接よ
當時の文体の上よも表れて居と。和洋折衷、
雅俗折衷あど言をれと文体がそれど。さう
しと文体よあつてを、言葉そのものろ有つ感
覚言葉と言葉の間から生じて来る陰影とい
ふよりし、寧ろフキギエアの構成よ重き

や
136

7

長篇

この文体で苦ん

を置いと。この文体の参考よもあり役よも立
つとこのを徳川時代の俳文、殊よ俳文から出
発してて特異な発達をとげと西鶴の文章あど
であつとが、既成の句法よ煩をされ易くて、
結局それを驅使する作家等とて散詩とつ
かか又と散文とつつかあいやうな一種の言ひ
ををしよ苦められるやうな成つて行つと思
ふと川上眉山君あどが奈何とて途中で止めてしま
つと川上眉山君あどが奈何とて途中で止めてしま
作者自身の文体で苦められたかとりふこ

とを、晩年より川上君の文体が一変しとの●を
 見ても、又と以前とを打つて変つと投げやり
 ぶものを書かれるやうな成つとのを見ても、
 その消息を知ることが出来る。
 新しい散文とりふものが、どうしてもしつと
 自由な道を取つて起つて来あけれを成●らぶ
 かつと。日露戦争前後を一つの回轉期とし●
 て、それから後より創作の志しとものを皆その
 完成は協力しと。